



# コロナ禍は私たちに 変わることを求めたのか？ —今改めて協同の意味を問う—

はしりい よういち  
走井 洋一

本稿を執筆している今日現在、三度目の緊急事態宣言の発出が決定されました。日本でCOVID-19感染者が報告されて以降1年以上経過してもなお終息しない現状では、世間の流れにあまり敏感ではないと自覚している私ですら無縁でとどまることはできませんでした。大学でのリモート授業、子どもの学校の休校措置、そして何よりも、周辺で種々のことが生じ続けてきたことで私自身の「生」が脅かされているというリアルな感覚を日々引き起こすものだからでした。

この「生」が脅かされているという感覚は私に固有なものではないはずです。ここで「生」とは生命を基盤としながらも生活や生涯などを含む多義的な言葉として用いています。COVID-19についてはまだわからないことが多いものの、基礎疾患等がなければ十分な免疫力を保っていることでウイルスに曝されても——感染源を絶ち、ウイルスに曝されないための手洗い、マスク等は大前提としても——発症・重症化しにくいと考えられており、免疫力を保つための適切な栄養と休養の必要が指摘されています。しかし、適切な栄養と休養は日常生活を十全に送ることができはじめて可能となるものです。ここで私たちは日常生活にある種の格差があったことに

改めて気づかされます。これまでは目に見える指標によって貧困という事態を捉えようとしてきたわけですが、その網には漏れていたけれども「ぎりぎり」の生活のなかでなんとか「生」を保っていた人たちがコロナ禍を契機として顕わになったということです。例えば、コロナ禍によって職を失った人たち、急激に進むICT化の波からこぼれ落ちてしまった人たち、そして、「生」を支えていた人との関わりを奪われ絶望してしまった人たち、など枚挙にいとまがありません。

こうした現状と向き合おうとしている協同組合は多数あります。ただ一方で、人と人が協同することを前提としている協同組合は、感染拡大防止のもっとも効果的な方策が人と接触しないことであることからこうした現状に向き合うことを困難としているとも仄聞します。ここで改めて考えたいのは協同ということについてです。

協同とはそもそも異質な他者と同じ課題に向き合ったときに生起するものであるといえますが、コロナ禍が協同することを困難にしていると感じているのだとすれば、それは私たち自身の思考に問題があるからではないでしょうか。H.アレントが的確に指摘したように、私たちは孤独（Einsamkeit）でいること

を必要としている存在です。しかし同時に、「生」に関わる孤立あるいは見捨てられていること（Verlassenheit）は私たちに苦しめます。すなわち、私たちは本来的に孤独でありそれぞれに異質ではあるけれども、「生」に関わっては協同する必要があると読み換えることもできます。つまり、コロナ禍によってぎりぎりの生活であったことが顕わになり、他者が異質なものとして改めて認知されることになったことで、同じ課題のもとで協同している本来的には異質な他者を同一視してきた私たち自身の欺瞞が暴露されたといえるのではないのでしょうか。協同が困難になったのではなく、私たちの思考そのものの問題が明らかになったというべきでしょう。

M.サッチャーが目指したTINA（There Is No Alternative）な原理として新自由主義は私たちの経済だけでなく、生活のあらゆる側面に浸透してきました。オルタナティブを排除するこの一元的な原理のもとで私たちは多くのものを失ってきたといえます。その一つは、本来的に異質である他者と異質なまま協同することではなかったのでしょうか。協同組合を含む社会的経済が現在新自由主義のオルタナティブとして注目されています。しかし、それもまた、新たな排除の論理を生み出すことにつながるのではないかと危惧しています。オルタナティブである限り、それは新自由主義に代わるものとして新たな排除を生み

出す可能性があるからです。お互いが異質であることに立ち戻りつつ、その都度の協同を生み出していくことが求められているのだとすれば、新自由主義もまた、一つの在り方として是認しなければならないはずだからです。

そうだとすると、私たちにできることは、異質な他者と同じ課題に向き合う協同の営みを、単一のものを志向しようとする私たち自身の思考へのカウンター（対抗）として保持し続けることではないでしょうか。つまり、ともすれば単一のものを志向しようとする私たち自身の思考——生物としての人間の特性上安定を志向することは避けられません——のもつ危険性を回避しつつ、異質な他者との協同というある種の緊張状態に居続けることこそ志向されるべきではないのでしょうか。コロナ禍は「生」が脅かされているという感覚を生み出し、私たちに緊張状態にとどめてきたといえますが、私たちはより積極的にそうした緊張状態に居続けることこそ協同するということであったことを今ここで改めて確認する必要があるのだと思います。

（東京家政大学家政学部教授）